言語文化教育研究学会 年次大会
フォーラム発表(2023年3月4日 関西大学)

【フォーラム】

インクルーシブな言語学習環境をめざしたケース教材の開発

―言語教育関係者のアウェアネスを高めるために―

発表者
植村　麻紀子（神田外語大学），古屋　憲章（山梨学院大学），池谷　尚美（横浜市立大学）
中川　正臣（城西国際大学），山崎　直樹（関西大学）

発表者

植村　麻紀子（神田外語大学）：中国語教育
古屋　憲章（山梨学院大学）：日本語教育
池谷　尚美（横浜市立大学）：ドイツ語教育
中川　正臣（城西国際大学）：韓国語教育
山崎　直樹（関西大学）：中国語教育

本フォーラムの流れ

- 13:00-13:10
  趣旨説明・ケース教材の研究的背景
- 13:10-14:10
  ケース教材（事例1）を用いたワーク
- 14:10-14:30　総括ディスカッション

① 本ケース教材の使用を体験してみて、言語教師としてどのように考えたか。

② 本ケース教材を使用することで、インクルーシブな言語学習環境に対する言語教師のアウェアネスを高めることができるか。

本フォーラムの流れ

●13:10-14:10
ケース教材（事例1）を用いたワークは

お近くの席の方と
３～４人でお話しいただきますので、
そのつもりでお座りください。

席は自由です。

1. 趣旨説明

・研究の背景

・これまでの活動のまとめ

「言語教育におけるインクルージョン」

http://incl4lang.html.xdomain.jp

研究の背景

　筆者らは国内外の高校・大学等で中国語教育、韓国語教育、ドイツ語教育、日本語教育に携わっている。その中で、運動的・感覚的・認知的属性の多様さ、言語的背景の多様さ、あるいは外向性・内向性などの個人的な指向の多様さなどが原因で、言語学習に何らかの困難を感じている学習者がいることを把握した。

　「平均的な学習者」「多数派の学習者」のイメージに基づいて設計されてきた従来の言語学習環境においては、学習者それぞれの多様性が十分に尊重されていないのではないかという問題意識を持つ。

と同時に、そのような言語学習環境を設定する我々自身、すなわち言語教育関係者（教員、事務職員、TA、ボランティア等）のアウェアネスを高める必要性を実感するようになった。

　これにより言語学習の当事者との対話を通じて、言語学習環境の変革を試みようと考えた。

当事者駆動型の言語学習環境設計

「当事者駆動」の定義（植村ほか，2022：80）

言語学習において何らかの問題を意識せざるを得ない当の本人と、言語教育実践者／研究者である筆者らが、共に言語学習環境設計の「当事者」として協働することにより、言語学習環境の変革を進めていくこと。

「当事者駆動型の言語学習環境設計」の定義
（植村ほか，2022：84）

言語学習の「当事者」（学習者） と言語教育実践者／研究者が共に言語学習環境設計の「当事者」として、言語学習の「当事者」が個々に望む学習リソースに障害なくアクセスすることを保障する環境を整備するとともに、よりインクルーシブな言語学習環境を構築していくことである。

具体的な研究手順（植村ほか，2022：84）

1. 筆者らと言語学習の「当事者」との対話を通して、協働的に構築された語りから「当事者」にとっての言語学習の世界を描き出す。

2. 上記1で描き出された世界にもとづき、言語学習の「当事者」にとっての学習上の問題やニーズを明らかにする。

3. 上記2で明らかになった問題やニーズを解決する方法を探りつつ、よりインクルーシブな言語学習環境を設計し、実践する。

言語学習の当事者との語りから浮き彫りになった問題やニーズをケースにし、言語教育関係者（教師、コースコーディネーター、事務職員など）に問いかけ、共に考える教材化を試みる

本教材における言語学習の当事者例

Aさん：ディスレクシア、フリースクール職員
Bさん：脳性麻痺、発達障害、大学生
Cさん：注意欠如・多動症（ADHD）、自閉スペクトラム症（ASD）、大学生

の語りを中心に、架空の人物の複数の組み合わせも含む。

ケース教材の目的

- 発表者らは，学習者の抱える困難に直面することになった教師の困惑と試行錯誤を語ったナラティブを、事例として提示するケース教材を試作した。
- この事例は，教師のナラティブというスタイルを取るが，その内容は，言語学習の当事者のナラティブを再構成して視点を変えたものである。
- ケースを媒介に対話と省察を行うことをとおし，言語教育関係者にことばの教室をインクルーシブな学習環境に変えていこうとする意識を醸成していくことが本教材の狙いである。

ケース教材の目的

・具体的には、ケースを様々な観点から解釈したうえで、ケースに基づき言語教育関係者としての自身の経験を振り返る。

・さらに、こうした困難が社会的にどのように構成されるかに関しても考える。

・同時に，経験知への過度な依存を乗り越え、困難な事態を社会的・歴史的に，いわばメタ的に捉えられるような視点を育てることも目指す。

本ケース教材が想定している3つのレベル

ナラティブをリソースとする教材として、ハ木（2022）では、

ミクロレベルの活動（気づく・共有する）、
メゾレベルの活動（表現する・関係を作る）、
マクロレベルの活動（発信する・つなげる）

に分けて、各ストーリー（日本に移住した方が実際に語った語り）について学習者が話し合うことが提案されている。本ケース教材では、これを参考に、以下のような3つのレベルでケースを分析できるような問いを設定する。

本ケース教材が想定している３つのレベル

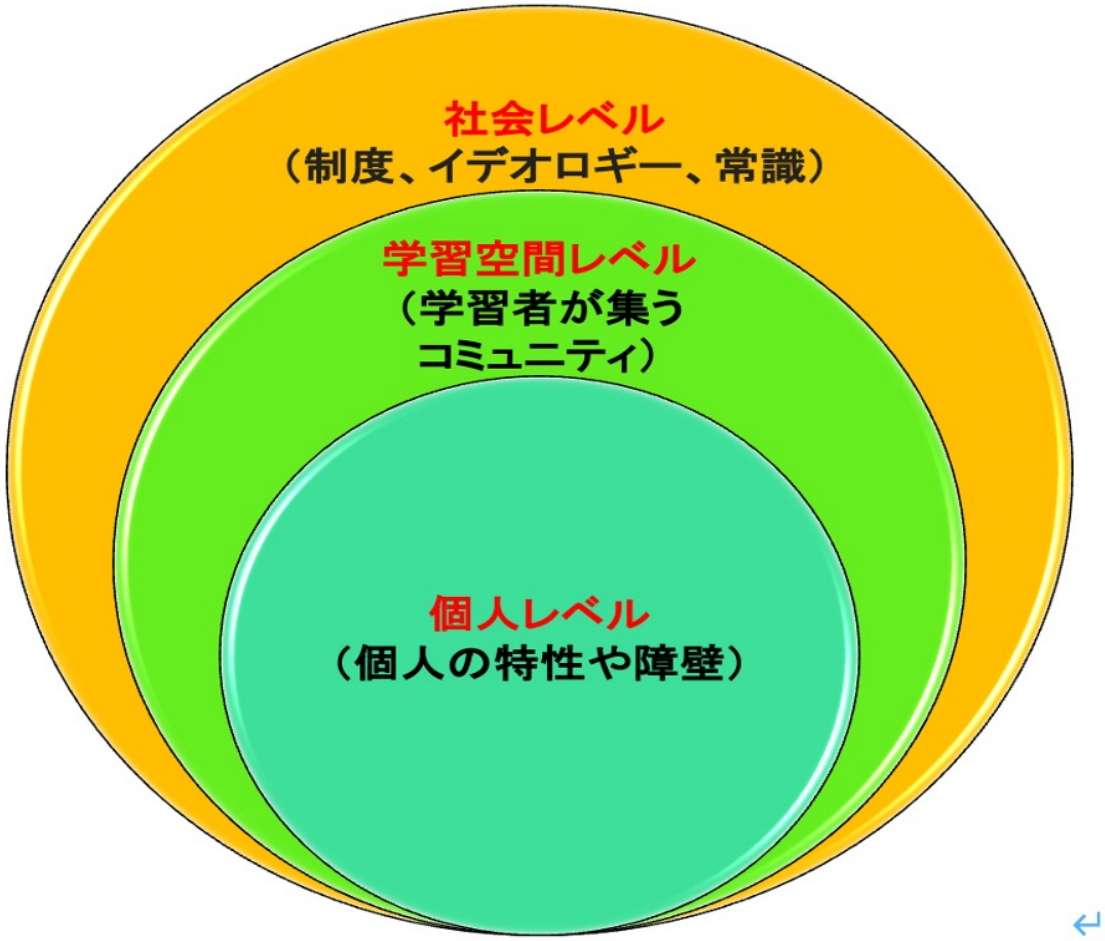

図１　本ケース教材が想定している３つのレベル

本ケース教材が想定している３つのレベル

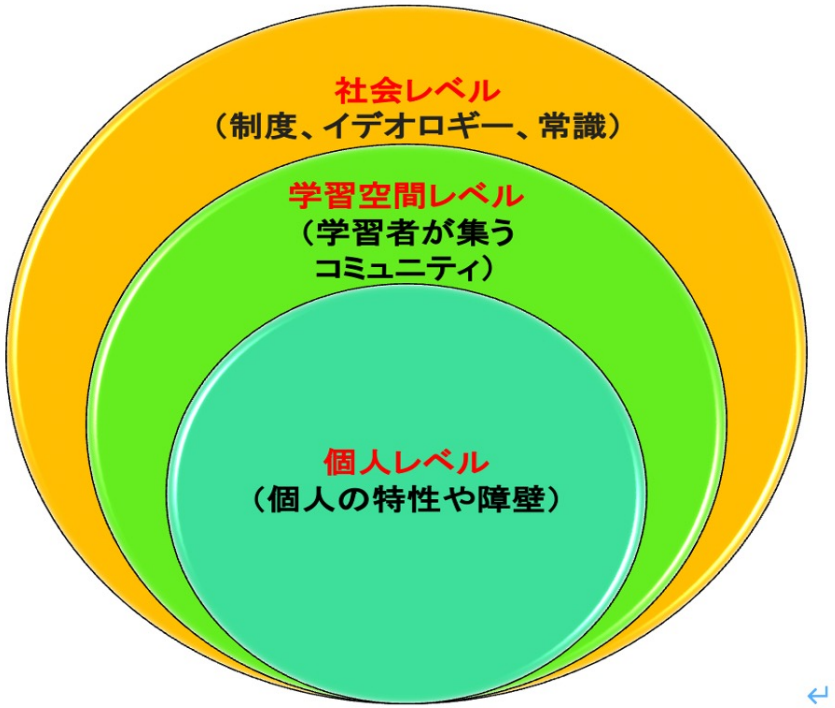

図１　本ケース教材が想定している３つのレベル

「個人レベル 」とは、

ある特性や障壁などに気づき、それを言語化することである。具体的には、このような学習者は身近にいるか、どうしてこのような障壁が起きたのかを考える。

本ケース教材が想定している３つのレベル

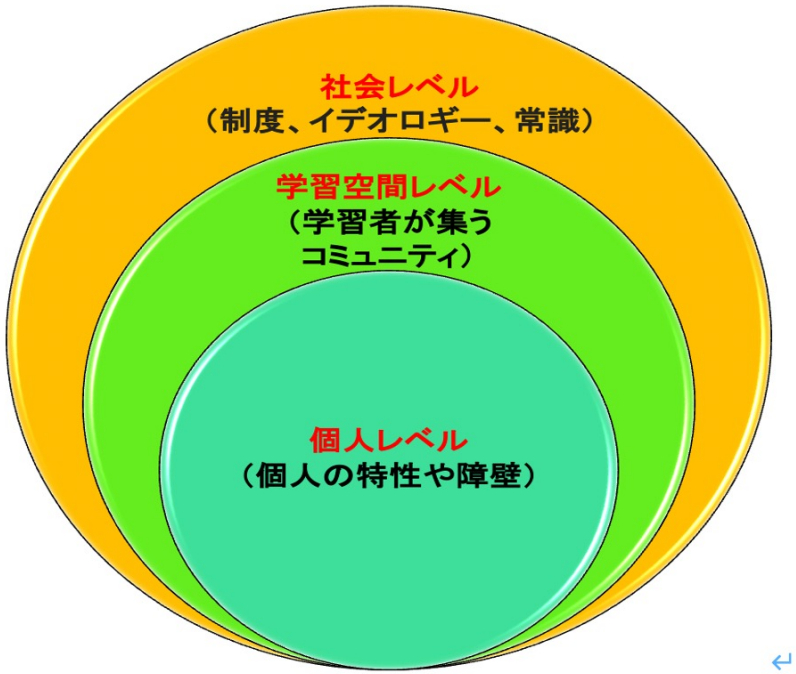

図１　本ケース教材が想定している３つのレベル

「学習空間レベル」とは、学習者が集まるコミュニティ（例えば教室）において起こる障壁を指す。具体的にはその障壁はなぜ起きるのか、言語学習において避けられないものなのか、個人の努力で乗り越えるべきものなのか、既存の枠には問題はないのかなどについて考える 。自分が関わる教室、コースや制度、枠組みに固定観念、権力があるのか、それは変えるべきか、変えられるものかなどについても問う。

本ケース教材が想定している３つのレベル

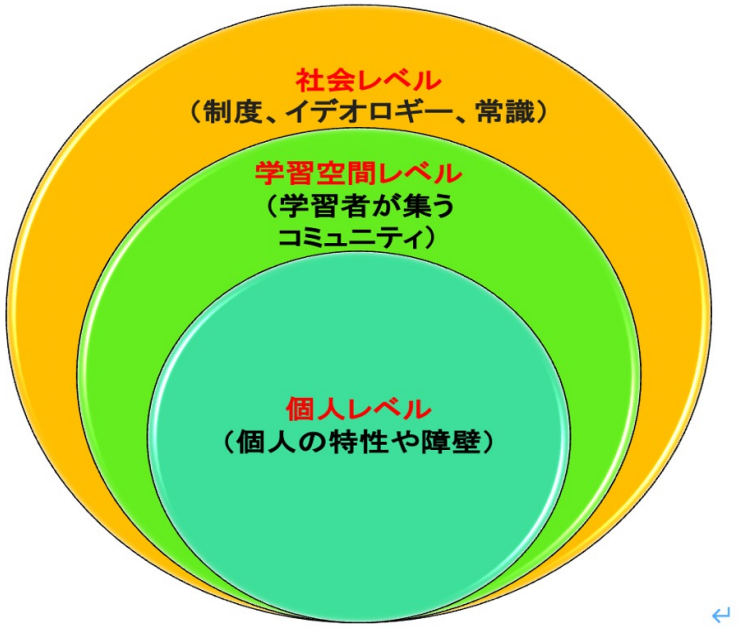

図１　本ケース教材が想定している３つのレベル

「社会レベル」とは、個人や学習空間を取り巻く制度、イデオロギー、常識などを指す。例えば中国語を学ぶということはどのようなイメージを持たれ、どのように評価され、どのような教育がよいとされるか、そもそも高校・大学という学校社会、言語教育に携わる者の社会、ひいては日本社会がどのような構造になっているかについて考える。

本フォーラムの目的

- 本フォーラムでは、開発中の教材の一部を使用し、ケースを媒介に対話と省察を行うプロセスを参加者に体験していただく。

- そのうえで、ナラティブに基づき作成したケースを媒介に言語教育関係者の意識に働きかけることの可能性と課題について議論する。

事例教材へのリンク

事例教材

本ケース教材の使用を通し、言語教師およびことばの教室に期待される変化

1）教育・学習観、役割観に関する省察

―技術革新、自身の常識（これが当たり前）と批判的に向き合う。

2）想像力

―多様な学習者のそれぞれ異なる背景に対する想像力を養う。

―マニュアルを求めようとしない態度を養う。

3）対話の回路

―結局、理解できない

→理解できないからこそ、学習者や同僚との間に対話の回路を開く。

↓

多様な学習者が教室で息ができるようになる
「暖かくなくても生ぬるい場」へ

ケース教材（事例1）を用いたワークの流れ

13:10-13:15—ケース教材の構成の説明

13:15-13:20—ケースを読む前に

13:20-13:25—各自で事例1を読む＋グループ分け

13:25-13:35—「問A．個人レベルの問い」で考える

13:35-13:45—「問B．学習空間レベルの問い」で考える

13:45-13:55—「問C．社会レベルの問い」で考える

13:55-14:05—事例1に関するディスカッション

14:05-14:10—質疑応答、事例2の紹介

当日修正版

ケース教材（事例1）を用いたワークの流れ

13:35-13:45―「問A．個人レベルの問い」で考える

13:45-13:55―「問B．学習空間レベルの問い」で考える

13:55-14:05―「問C．社会レベルの問い」で考える

14:05-14:15―事例1に関するディスカッション

14:15-14:30―総括ディスカッション←イマココ

（質疑応答、事例2の紹介含む）

総括ディスカッション

【問い】

①本ケース教材の使用を体験してみて、言語教師としてどのように考えたか。

②本ケース教材を使用することで、インクルーシブな言語学習環境に対する言語教師のアウェアネスを高めることができるか。

参考資料

・植村麻紀子・中川正臣・古屋憲章・池谷尚美・山崎直樹（2022）．「当事者駆動型の言語学習環境設計とは何かー言語教育におけるインクル―ジョン実現のためにー」『神田外語大学紀要』34. pp.69-87

・八木真奈美（編）（2022）．『話す・考える・社会とつなぐためのリソース　わたしたちのストーリー』ココ出版.

ご清聴ありがとうございました

本研究はJSPS 科研費 基盤研究(C) 課題番号20K00777
による助成を受けたものです。

本日の感想・コメントのご記入
よろしくおねがい致します（無記名・自由記述のみ）